平成二十九年度　第百十九回

京都大学書道部

初夏書展

日時

六月十七日・十八日

十時～十七時

（十八日は受付十六時まで）

場所

建仁寺

西来院

禅居庵

―巻頭に寄せて―

以前知人に、自分の中で大事な言葉なのですが「初心忘るべからず」と書いてくれないか、と頼まれた事があります。この言葉、一度は耳にしたことがあると思いますが、どのような意味かご存知でしょうか。書くのにあたって辞書を引くと、『㊟初心忘るべからず《世阿弥の「花鏡」にある言葉》習い始めのころの謙虚で真剣な気持ちを忘れてはならない。』とあります。なるほど知っている通り、と思いつつも前半の括弧の中が気になり調べてみると、実は初めは少し異なる意味だったと知りました。

世阿弥は室町時代の能役者・能作者で、『風姿花伝』『花鏡』などの能楽論書を残しています。『花鏡』は四十代から老後に至るまでの能についての芸術論を説いたもので、その最後「奥の段」に次の一節があります。

しかれば当流に、万能一徳の一句あり。
初心不可忘。
この句、三箇条の口伝あり。
是非の初心不可忘。
時々の初心不可忘。
老後の初心不可忘。
この三よくよく口伝可為。

そもそも世阿弥は「初心」を「未熟な芸の状態」といった意味で使っている。青少年期の未熟な芸をその善悪を超えて忘れてはならない。未熟さを覚えておくことで同じ失敗を防ぎまた上達ぶりの尺度にもなる。そして修行をしていく各段階にもそれぞれの初心があるはずで、それも忘れてはならない。また年老いてある程度の域に達しても能に終わりはないので、その年齢にふさわしい芸を極めることも初心である。生涯通して初心を頭に置くことで芸は向上する、としています。

書道にもこの教えは通じるところがあるのではないでしょうか。書道自体にしても各法帖や書体にしても、始めたばかりのころの下手な字は恥ずかしくて思い出したくない気もします。続けていると初めからできていたように勘違いしそうにもなります。しかし、その時々の失敗やどう乗り越えてきたのか、そして今も未熟なのだと自覚してこそ前に進めるはずです。まだまだ未熟者の中の未熟者ですが、この先も長く書道を続けこの言葉を心において少しずつでも精進していきたいものです。

さて、最後となりますがこの度無事に書展を開催できるのは今年度より顧問を快く引き受けてくださった宇佐美文理教授と行友三輪子様、技術顧問の寺本蒼玄先生をはじめとする多くの方々のおかげです。この場を借りて心より御礼申し上げます。

そしてこの第百十九回京都大学書道部初夏書展にお越し下さった皆様、本日は誠にありがとうございます。正統派の臨書作品から遊び心のあるものまで様々な作品がございます。どうぞごゆっくりとご覧ください。少しでもお楽しみいただければ幸いです。

平成二十九年六月吉日
京都大学書道部　部長　小林由佳

書は人なり

宇佐美 文理（京都大学大学院文学研究科教授）

「書は人なり」という言葉があると思います。これは、とりわけ書をたしなむ人が好む言葉ではないか、とも思います。

しかし、この言葉には以前から疑問を持っています。これは本当なのでしょうか。そもそもこれはどういう意味なのでしょうか。

この言葉は、「書にはそれを書いた人の人となりがあらわれる」と言い換えることは可能でしょうか。もし可能だとすると、「気性の激しい人の書は激しい字になり、気性のおとなしい人の書はおとなしい字になる」ということでしょうか。それが必ずしもそうではないことは、書を書くみなさんが一番よくご存知でしょう。その人が書いた字を見たことがない仲良し十人を集めて、その人たちの中の一人の字が書かれた紙が誰のものなのか当てるのは、不可能です。

「いや、それは違う。あなたは〈字〉とされているが、ペン書きとかではわからないけれども、〈書作品〉ならばやはり人柄が出るものだ」とおっしゃるかもしれません。

それはそうなのかもしれません。あるいは「その書作品に表れているその人の人柄を読み取れるかどうかが問題なのだ」とされるかもしれません。さらには「上手とか下手とかいうとらわれを捨てて、自然と自分自身が表れるような書を書かねばならない」という考え方もあるかもしれません。

わたくしは、「書は人なり」ということばが、「書を見るとその人がしのばれる」という意味であるなら、それは自分自身の経験からして、その通りであると思います。それは、その人の声と同じように、まさしくその人の行為が記録されたものとして、その人を想うよすがとなるように思います。

おそらく考え方は人それぞれかと思います。それぞれの「書は人なり」を、作品制作を通して、また鑑賞を通して考えてみるのも一興かもしれません。

部屋に飾る作品（一）

寺本 蒼玄（京都大学書道部 技術顧問）

部屋に飾り易い作品で、代表的なものとして、色紙がありますが、色紙の場合、気をつけなければいけないこととして、額に入れるか、色紙掛や軸に紐で止めて観賞するかによって書き方が変わります。

額に入れる場合は色紙の周りに貼ってある金色の縁は隠れてしまいます。色紙の縁から五ミリ程は隠れるので、やゝ内側寄りに文字を入れるようにしましょう。普通にバランスよく配字しますと、額に入れた時、見た感じが外側に一杯に見えます。色紙掛や軸に飾った場合は、そのままの配字で良いと思います。

次に文字の収め方ですが、一字の場合、縦に長い文字、又は横に広がる文字が良いのですが、左右対称形の文字や、画数の少ない文字は難しいので避けるようにしましょう。

二字句の場合、縦に収める時は、上の字は小さめで、下の字は横に広がると収まり易いです。又は、二字共広がる文字も可です。縦に長い文字二字の場合は、色紙を横に使うと良いのですが、やはりどちらかが画数が少ないほうが良いでしょう。

三字句、四字句の場合、三字目の文字が大切です。画数の多い字が良いですね。文字の形により、縦型式か横型式に収めて下さい。

好きな言葉や語句で選文するのも良いですが、初めの内は、文字の配字が良い語句を選文するようにしましょう。

次回は五字句以上について説明します。

臨書と創作

○臨書

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

臨書は段階や態度によって三種類に分けられます。最初のステップは、古典の字形や用筆に迫ろうとする、「形臨」と呼ばれるものです。形をまねることは、その古典に迫る最も近い方法です。

形がある程度まねられるようになってくると、次は古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点をおいてとらえようとする「意臨」の段階に進むことができます。このような、形以外の要素をとらえようとする態度は、真筆が歴史の中で失われ、模写したものや拓本しか残っていないような古典を臨書する際に求められることがあります。

古典をよく学んだうえで、書くときはそれを見ないで書く方法を「背臨」、臨書を重ねた後、臨書から学び取った古典の特徴や表現方法などを生かして、その古典とは別の字句を書くことを「倣書」といいます。この態度は創作につながるステップとなります。

書のあらゆる作品は、このような過去の作品から学ぶことを基盤としています。書道における基本と呼べるものが、臨書なのです。

○創作

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

自分が伝えたいこと、表現したいことを明確にして、それに合った素材（語句や詩文）や表現方法を選び、試行錯誤しながら、自分の主張や個性が表れた作品になることを目指します。

臨書によって古典から得られる様々な表現方法を用いることで、作品に味わいや深みを出すことが出来るようになります。

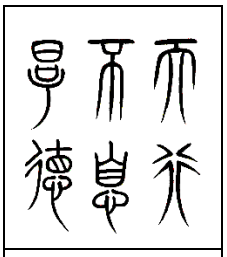
○法帖

芸術作品として残された個人の書を、石や木に刻して拓本をとり、臨書や鑑賞に便利なように帖仕立てにしたものです。

今回の初夏書展では、各臨書作品の右横に臨書した箇所の法帖を掲示して、皆様にご覧いただけるようにしています。

作品鑑賞の参考に、こちらも是非ご覧ください。

書体について

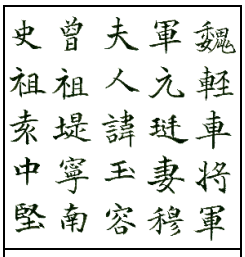


『篆書』

漢字のもっとも古い形で、現在使われている漢字のもとになった字体です。秦朝に小篆として統一されたものが一般的です。均一な太さの線が特徴です。

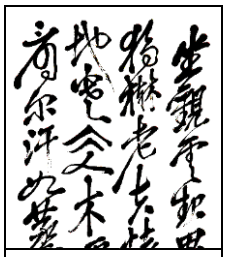
『隷書』

役人が複雑な字形だった篆書を早書きした際生まれた字体です。字形は横長で、時代が進むにつれ、線の終わりに独特な「波磔」がみられるようになります。



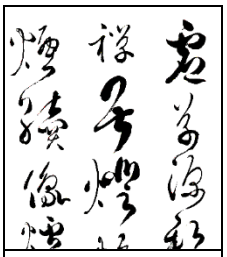
『楷書』

隷書からさらに記号化された、バランスの取れた字体です。その整った字形から、現在の漢字の基本とされています。



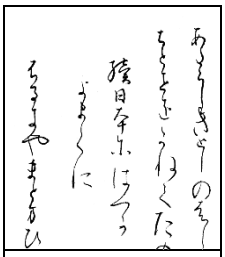
『行書』

隷書から発展した字体で、点画や線にしなやかさと変化がみられます。筆の速度や点画の流れが最も重視される書体といえます。



『草書』

隷書を早書きすることから発展しました。線の省略や筆順に変化があり、自由度の高い作品となります。文字から文字へと流れる「連綿」の美しさも魅力です。

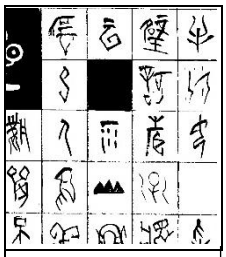


『かな』

日本独特の表音文字です。草書の簡略化によって生まれました。漢字にはない流麗な筆致と同じ音を表す複数のかな、「変体仮名」による創意工夫が魅力です。

『調和体』

日本語の近代詩文や現代詩などを題材に、誰にでも親しみやすい書体で書いたものです。漢字かな交じりという日本語独自の特徴を生かした作品形態です。



『甲骨文』

亀甲・獣骨に刻まれた中国古代の文字です。これは最古の漢字の形であり、古代に行われた占卜の記録を刻したものです。

書家説明集

文責：原誠人

○書史概観

書の発展は**王羲之(おう・ぎし)・顔真卿(がん・しんけい)**と共にある。中国の書人は時に真卿に振れて意を主張し(**黄庭堅(こう・ていけん)**など)、時に羲之に返って品格を求め(**文徴明(ぶん・ちょうめい)**など)てきた。明末清初に「見せる」書が飛躍したとき**王鐸(おう・たく)**が範としたのは羲之であり、清後期に碑文(500 頃成立した一連の**造像記**など石刻の楷書)研究が興ったとき何紹基(か・しょうき)や趙之謙(ちょう・しけん)が並行で学んだのは真卿であった。日本では**空海**らの活躍で羲之を基盤とする書が確立した。**かな**の成立以後は漢字書も完全に**和様**化して日中書史は別の歴史を歩んだが、明治に日下部鳴鶴(くさかべ・めいかく)、中林梧竹(なかばやし・ごちく)らにより書壇の交流が進むや、羲之・真卿の影響は日本でも再び顕在化して今に至る。

○王羲之(307？～ 365？(晋)) ～究極の規範、永遠の書聖～

楷・行・草の各書体を整理完成させた。書史上最高傑作の一つとされる行書**『蘭亭序』**(臨：覚道、森)はもとより、**『東方朔画賛』**(臨：挟間)等の楷書、『十七帖』等の草書も韻致に富み格調高く、「書聖」と仰がれる。羲之の書を継ぎはぎした**『集字聖教序』**(臨：松尾、村上、吉岡)は行書修練に最適の題材とされるが、編者懐仁(えにん)はこれをまとめあげるのに二十余年を費やしたという。(参考：神崎**『**(臨)**楽毅論』(光明皇后**宸筆))

○顔真卿(709 ～ 785 (中唐)) ～古法の破壊、或いは止揚～

安史の乱に際し玄宗を助け名声を得、李希烈の反乱に際し懐柔を拒絶して最期を迎えたという忠義の人。筆跡ごとに趣が異なり「一碑一面貌」と言われる。『蘭亭序』と双璧の行書**『争座位文稿』**(臨：竹内)は激情のまま右に傾き左に流れ、楷書**『多宝塔碑』**(臨：上村)は均整と生々しさを兼ねる。『裴将軍詩』に至っては五書体が混在する(破体)。羲之の伝統を破る書風に歴代書家の間でも好悪は分かれるが、評価は争い得ない。

○文徴明(1470 ～ 1559 (明)) ～文人は羲之・庭堅の夢を見る～

9 度科挙に挑んだがすべて落第、54 歳で官職を得るも 3 年で辞職した。詩書画に通じた明代を代表する文人で、毎日「千字文」を 10 本写したという。黄庭堅に酷似した**『行書詩巻』**(臨：佐武、金岡)、**『自書七言律詩幅』**(臨：木下)等が有名であるが、それ以上に羲之(特に『集字聖教序』、『楽毅論』等)に傾倒し真に迫った。

○王鐸(1592 ～ 1652 (明末～清初)) ～その屈託を書に込めて……～

明(漢民族)の宰相でありながら清(女真族)に投降し仕えたため漢民族に嫌われ、作品も多数流出した。羲之の臨書に専心してリズムを吸収、辿り着いた心手一如の連綿(続け書き)は章法(配字や流れ)に革命をもたらし、現代日本の展覧会書道への影響も絶大である。逆輸入により中国でも再評価を得る。(臨：矢野、角、平野)

○空海(774 ～ 835 (平安初)) ～弘法さまは日本の書聖～

「弘法筆を選ばず」の弘法大師。中国に渡って仏教を学び、高野山で真言宗を広めた。**橘逸勢(たちばなの・はやなり)、嵯峨天皇**とともに「三筆」の一人。代表作には**『風信帖』**(臨：渡辺)『灌頂記』のように字形・品位とも羲之の神髄を得た第一の系統と、『崔史玉座右銘』等、奇形の文字(「雑体書」)が並ぶ第二の系統とがある。三筆に共通するこの二面性は、それぞれ日本書史上重要な意義をもつ。(参考：原**『伊都内親王願文』**(伝 橘逸勢書)、一二**『哭澄上人詩』**(嵯峨天皇宸筆))　●その他の臨書作品：藤井**『**(集空海)**般若心経』**

参考文献：鈴木翠軒『新説和漢書道史』、石川九楊『書家 101』、『中国書道史の 10 人』(季刊墨スペシャル 28)

作品一覧

頁番号

技術顧問

寺本蒼玄　創作・『雲遊出世塵』……10
　　創作・『蓋世氣』……10

二回生

覚道直治　臨書・王羲之『蘭亭叙』……17
勝野初紀　創作・『森羅万象』……17
金岡杏祐　臨書・文徴明『行書詩巻』……27
金山優作　臨書・何紹基『臨漢碑 李剛石室殘字』……27
佐山侑莉　臨書・呉昌碩『行書幅』……28
中村勇真　臨書・趙孟頫『玄妙観重修三門記』……20
野田智子　臨書・傅山『遊仙詩』……32
挟間優美　臨書・董其昌『頌風図詩巻』……21
一二暉生　臨書・王羲之『東方朔画賛』……21
平井達也　臨書・嵯峨天皇『哭澄上人詩』……33
　　臨書・作者不詳『曹全碑』……21
　　臨書・作者不詳『中山王セキ方壺』……34
村上友梨　臨書・王羲之『集字聖教序』……34
森ちひろ　臨書・王羲之『蘭亭叙』……23
吉岡智志　臨書・王羲之『集字聖教序』……23

三回生

阿部朱夏　臨書・作者不詳『高樹解佰都等造像記』……11
今村朱里　臨書・呉熙載『楷書東方朔画賛』……11
上村香鈴　臨書・顔真卿『多宝塔碑』……16
浦川真由子　臨書・傅山『七言絶句幅』……12
小野日菜乃　臨書・作者不詳『孫秋生劉起祖等造像記』……13
神﨑七海　臨書・光明皇后『楽毅論』……17
木上博之　臨書・村上翠亭『百人一首 第五首 猿丸太夫』……18
郡健一郎　臨書・康里子山『述筆法巻』……27
小林由佳　臨書・作者不詳『礼器碑』……13
米田景　創作・『古事記』……28
近藤泰仁　臨書・欧陽詢『九成宮醴泉銘』……27
阪井田有紗　臨書・陳奕禧『七言絶句幅』……28
佐武千寛　臨書・文徴明『行書詩巻』……14
杉本舞　臨書・董其昌『酒徳頌巻』……19
角裕介　臨書・王鐸『草書七律五首巻』……19
橘大輝　臨書・張瑞圖『杜甫飲中八仙歌巻』……29
徳田寛生　臨書・『源氏物語絵巻 鈴虫』……30
仲村康太郎　創作・『瀛』……20
中村直樹　臨書・作者不詳『元斑妻穆玉容墓誌銘』……30
橘詰都　創作・『夕陽を見ているか』……31
原誠人　臨書・伝紀貫之『高野切第一種』……31
平野晶子　臨書・呉熙載『聖教序』……32
　　創作・『戯作三昧』……32
　　臨書・伝橘逸勢『伊都内親王願文』……33
　　臨書・王鐸『行書贈単大年家丈』……14
　　臨書・沈周『化鬚疏』……22
松尾和輝　臨書・王羲之『集字聖教序』……33

四回生

岡本晴香　創作・『僕クエスト』……12
木下有羽　臨書・文徴明『自書七言律詩』……18
竹内春佳　臨書・顔真卿『争坐位文稿』……30
深谷拓未　創作・『山頭火句』……34
矢野凱己　臨書・王鐸『為宿松書詩』……15
　　創作・『四季』……35
山口和樹　創作・『麟鳳遊』……15
　　創作・『春逐鳥聲開』……35
山科直也　創作・『芙蓉楼送辛漸』……23
　　創作・『鶴舞千年樹』……35
山崎夏野　臨書・孫過庭『書譜』……23
渡辺顕　臨書・空海『風信帖』……36

修士一回生

新井一矢　創作・『周易』……16
上西隆太　創作・『一日一歩』……26
牛山泰喜　臨書・作者不詳『魏霊蔵薛法紹造像記』……26
闇姝恒　創作・『折節』……16
角谷遊野　創作・『和而不同』……26
釜阪紘平　創作・『不撓不屈』……17
島津七明　臨書・作者不詳『曹全碑』……19
白谷暢浩　創作・『ファイト！』……29
宗哲仁　創作・『俯仰媿古今』……20

博士課程修了

藤井基弘　臨書・空海『集釈空海書　般若心経』……22

合作

金山優作／佐山侑莉
　　創作・『夏の清陰』……24
中村直樹／原誠人
　　臨書・蘇軾・黄庭堅『黄州寒食詩巻／黄州寒食詩巻跋』……24
勝野初紀／金山優作
　　創作・『春の来訪』……36
勝野初紀／野田智子
　　創作・『水月』……37
矢野凱己／山口和樹
　　創作・『風』……37

全体合作　『心理テスト』……25
三回生合作　『思い出のあの書を再び』……25
二回生合作　『他己紹介』……25
新入生合作　『新入生合作』……25

作品紹介

賛助作品

技術顧問　寺本蒼玄　先生

○西来院作品

『雲遊出世塵』　朴荀鶴

「雲のように自由に遊び、俗世の塵外に出る。」

豪快に力強く行を流して、ゆったりとした動きを表現してみました。

○禅居庵作品

『蓋世氣』　史記

「雄大で、盛んな意氣。」

遅速の運筆で筆勢を出るように工夫してみました。

○西来院

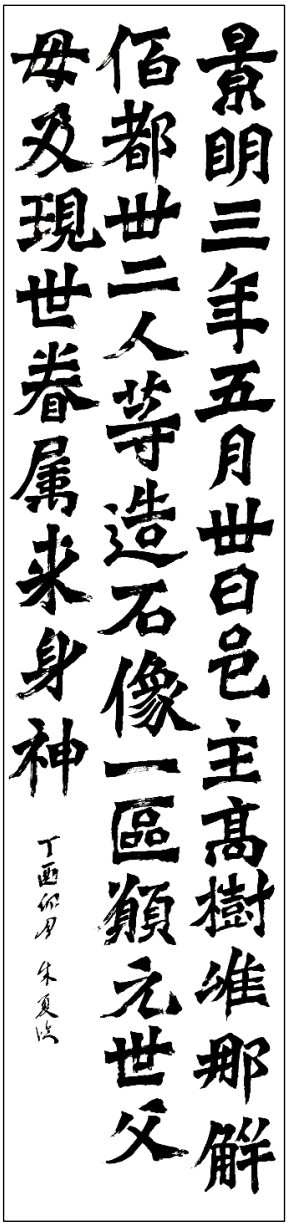
1

阿部朱夏　三回生

臨書　楷書　作者不詳『高樹解佰都等造像記』　二尺×八尺

「景明三年五月卅日邑主高樹唯那解佰都卅二人等造石造一區願元世父母及現世眷屬來身神」

一度は書いてみたいと思っていた二八作品に挑戦しました。造像記特有の、するどい始筆・終筆に苦戦しましだが、作品サイズの大きさによる魅力補正にも助けられながら、未熟なりに書き上げることができたと思います。



2

今村朱里　三回生

臨書　楷書　呉熙載『楷書東方朔画賛』　二尺×八尺

「大夫諱朔字曼倩平原厭次人也魏建安……（略）」

二八作品に初チャレンジしました。ぼってりとした楷書を書きたくて、探した結果この法帖に出会いました。書いていてしっくりきたので、もっと練習を積んで続きもまた作品として出したく思っています。

3

浦川真由子　三回生

臨書　行草書　傅山『七言絶句幅』　二尺×八尺

「龍王社鼓鬧村雩抛却殘書也杖扶愁無角抵酬花眼誰好麈糟俯灶觚」

テンポよく書けそうだと思い、これにしましたが、自分が持っていたリズムとはまた違ったので苦戦しました。傅山の独特なリズムは「抛却殘」でよく表れているように点画を移動する際に筆を大きく回すことで生まれます。やっているうちに、これはこれで好きだなぁと感じるようになりました。

4

岡本晴香　四回生

創作　近代詩文書　『僕クエスト』　二尺×八尺

「夢の片隅で描いた世界でいつか僕は大空を駆ける」

「書道は私にとってどういう存在なのか」と、自問しながら制作を進めました。まとまりが良いだけの作品にはしたくないといつも思っていますが、ついつい頭で考えてしまい勢いが乏しくなってしまいます。ダイナミックな作品が書けるように、これからも練習していきたいと思います。

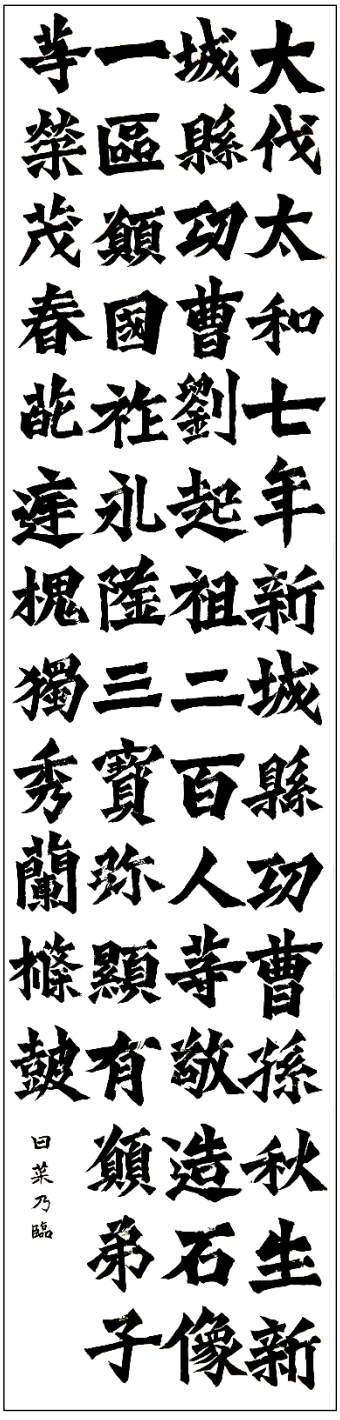
5

小野日菜乃　三回生

臨書　楷書　作者不詳『孫秋生劉起祖等造像記』　二尺×八尺

「大伐太和七年新城縣功曹孫秋生新城縣功曹劉起祖二百人等……（略）」

本作は、龍門二十本にも数えられる名書です。力強さや勢いは大事にしつつも、それらに偏重することなく、文字の美しさを活かせるよう努力しました。



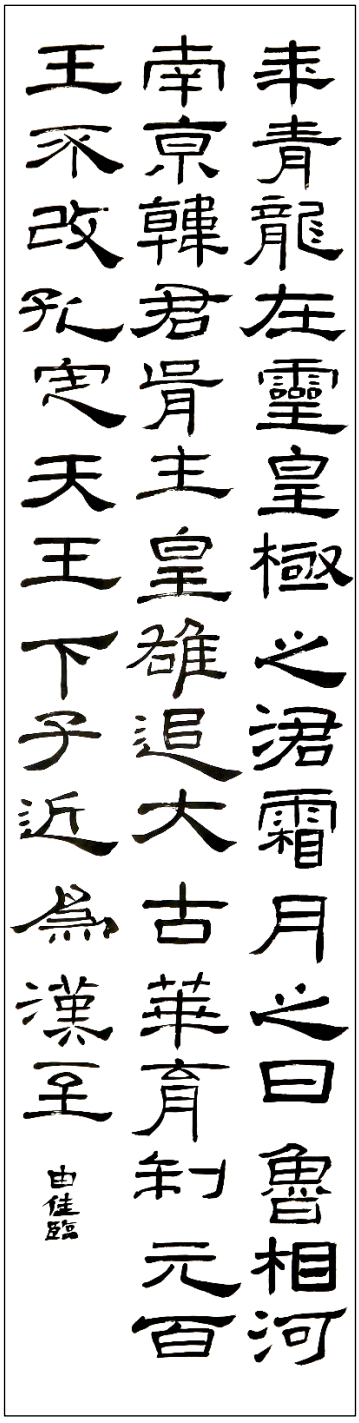
6

小林由佳　三回生

臨書　隷書　作者不詳『礼器碑』　二尺×八尺

「年青龍在霊皇極之涒霜月之日魯相河……（略）」

過去の書展で楷・行・草に取り組んできたので次は隷書でしょ、という事で礼器碑に挑戦しました。一文字の中での線と線の間隔、そして全体として行・列を「揃える」事がこの作品を美しく見せるための条件と思いながらも大雑把な性格が災いしてか苦戦を強いられました。もっときっちりした人間になりたいものです。



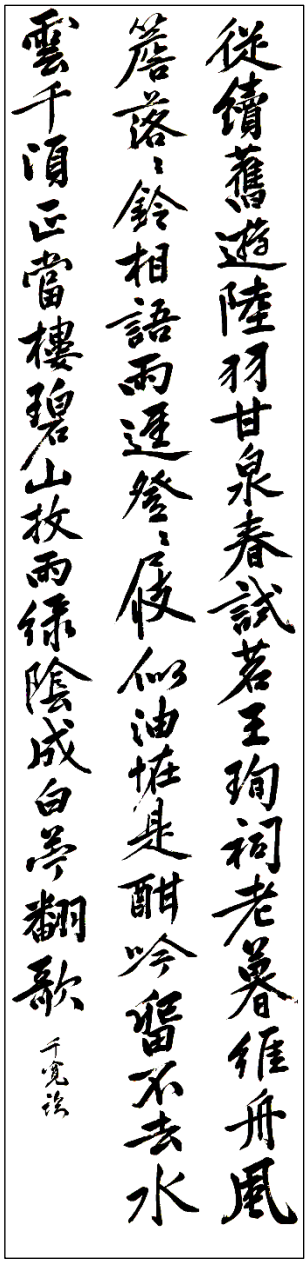
7

佐武千寛　三回生

臨書　行書　文徴明『行書詩巻』　二尺×八尺

「従續舊遊陸羽甘泉春試茗王珣祠老暑維舟風簷落々鈴相語雨逕登々屐似油衽是酣吟留不去水雲千頃正當樓碧山收雨綠陰成白苧翻歌」

前回に引き続き二回目の文徴明です。最初と最後の二文字を書きたいがために字数が多くなってしまい構成には悩みましたが、結局書きたいものを書くことにしました。晴れやかな気持ちです。



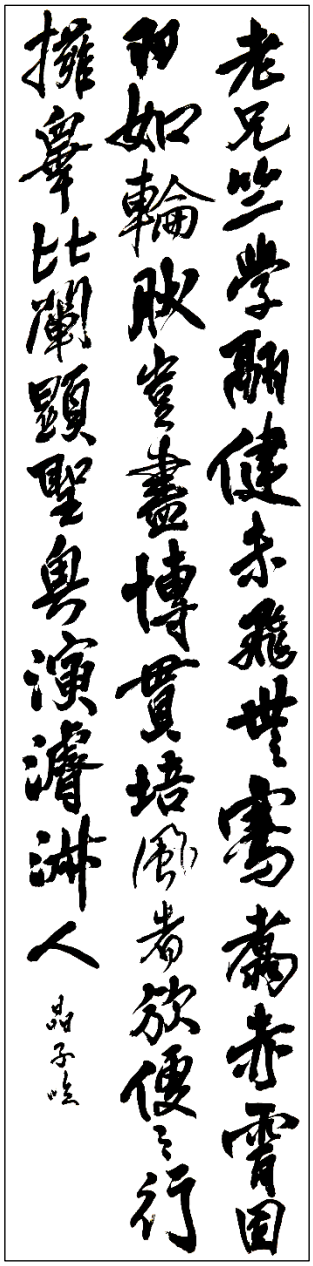
8

平野晶子　三回生

臨書　行草書　王鐸『行書贈単大年家丈』　二尺×八尺

「老兄竺学翮健未飛世之騫翥赤霄固羽如輪然豈尽博貫培風歟便之行擁鼻比闡顕聖奥演濬淑人」

最近、書道作品集のページをめくりながら家でのんびりコーヒーを飲む時間が至福です。その至高のひとときに出会ったのがこちら。王鐸晩年の線からにじみ出る貫禄に「ときめき」を感じる日々です。



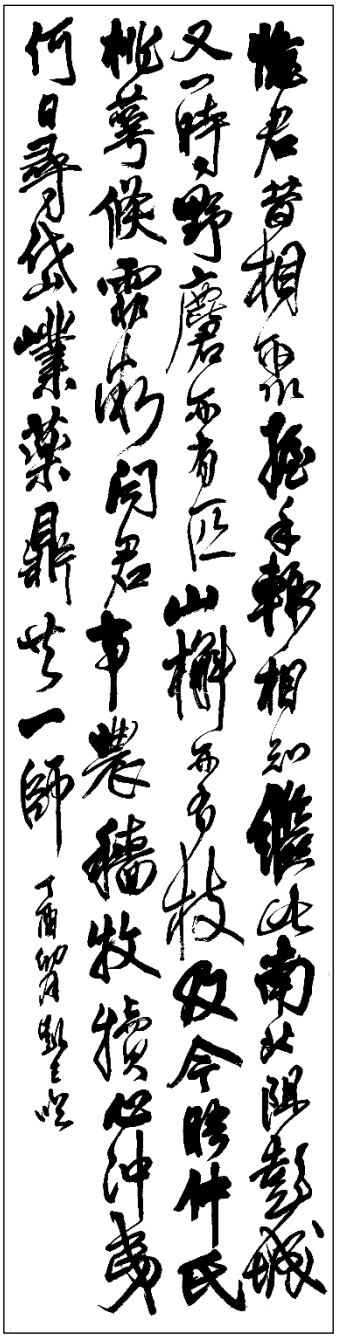
9

矢野凱己　四回生

臨書　行草書　王鐸『為宿松書詩』　二尺×八尺

「憶君昔相聚握手輒相知繼此南北阻彭城又一時野麝亦有匹山槲亦有枝及今晤仲氏桃萼倏霏微聞君事農穡　牧犢必沖夷何口尋岱嵲鼎共一師」

王鐸独特の行の揺れや濃淡のバランスはできる限り忠実に再現するように心がけました。線質などは個性が出てしまっているところが多々ありますが……それも味ということで。



10

山口和樹　四回生

創作　行書　『麟鳳遊』　二尺×八尺

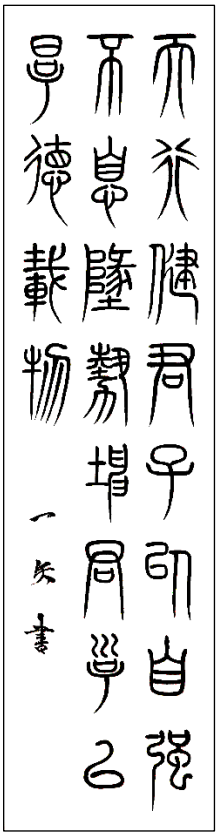
「麟鳳遊」

麟を書いたところで筆の軸から穂が抜けた。しかし、諦めずそのまま穂を直接手で掴み、書き上げたところ、今までで一番良い出来だった。故事成語の解説みたい。

11

新井一矢　修士一回生

創作　篆書　『周易』　半切



「天行健君子以自強不息地勢坤君子以厚德載物」

出典は『周易』という儒教の経書で、意味は「天の運行が順序正しいように、君子は自らの強い意志で世の中を発展させ続けなければならない。大地があらゆる生物を育むように、君子は人徳を厚くし大きな包容力を持たねばならない。」ということです。終筆が針のように鋭く独特な麗しさがある秦代の懸針篆から集字しました。

12

上村香鈴　三回生

臨書　楷書　顔真卿『多宝塔碑』　半切

「偈曰佛有妙法比象蓮華圓頓深入眞淨」

人は憧れに近付こうと頑張りますが、自分はそこに到達できないことにどこかで気付き、落ち込んでしまいます。書道においてもかっこいいと思った字を自分でも書いてみたいと思い、手を出してみますが、理想とはかけ離れた字しか書けず、嫌になってしまいます。憧れはそっと外から見つめているのが良いということでしょうか。

13

閻姝恒　修士一回生

創作　行書　『折節』　Ａ４横

「正是江南好風景 落花時節又逢君　（正（まさ）に是（これ）　江南（こうなん）の好風景、落花（らっか）の時節（じせつ）　又（また）君（きみ）に逢（あ）う）」

桜が舞い落ちる時、また君と出逢うというシーンですね。

14

覚道直治　二回生

臨書　行書　王羲之『蘭亭叙』　半切

「趣舎萬殊靜躁不同當其欣於所遇暫得」

独特の文字のバランスと流れを意識して臨書しました。ご批評よろしくお願いします。

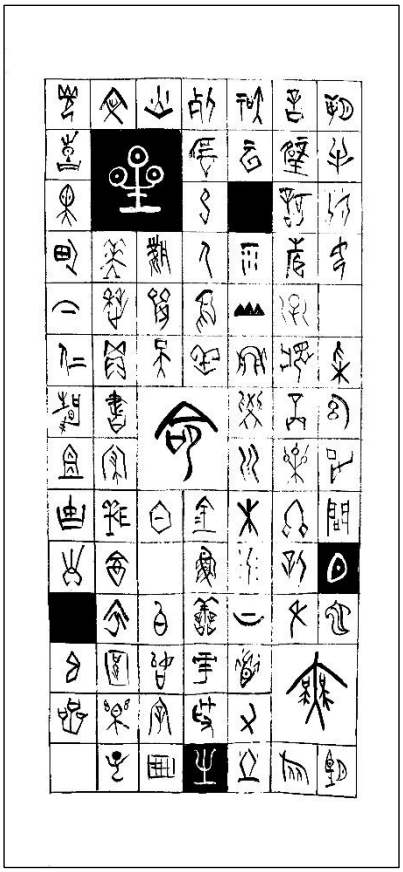
15

勝野初紀　二回生

創作　甲骨　『森羅万象』　全紙

「朔牛河女彩幻正問月他無望言壁……（略）」

森羅万象は、あらゆる現象、宇宙に存在する一切のものを指した言葉です。この言葉を聞いた時、何を想像しますか？ひとりひとりの感じ方が違うように、世界の見え方もひとりひとり違うのではないでしょうか。そんな事を考えながらこの作品を作りました。字の配置や色には意味があります。気づいていただけたら幸いです。



16

釜阪紘平　修士一回生

創作　『不撓不屈』　半切

「不撓不屈」

今年から宇治で新しい研究を始めました。初めての研究分野で、やることも多いのでなかなか大変です。それでも、強い意志を持って取り組んで行こうと思い、この言葉を書きました。いずれこの研究が人々の幸福を導くものになると願いつつ。

17

神﨑七海　三回生

臨書　楷書　光明皇后『楽毅論』　半切

「則舉齊之事所以……（略）」

いちばん好きな古典作品です。力強く芯のある線、はっと息を呑むような気迫。懐の深さを表すような線の厚みがまた素敵…。背筋をしゃんと伸ばしなさいと優しく叱ってくれそうな作品を目指しました。

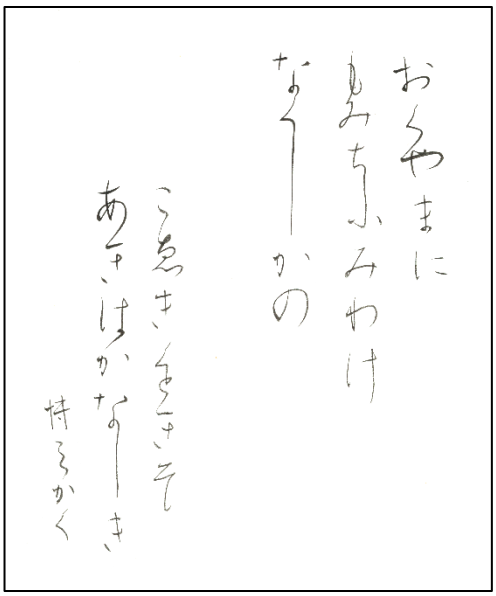
18

木上博之　三回生

臨書　かな　村上翠亭『百人一首　第五首　猿丸太夫』　色紙

「奥山に 紅葉踏み分け 鳴く鹿の 声聞くときぞ 秋は悲しき」

初めて書展に出品しました。偶然が重なり、かなを書いています。鹿の鳴く声は聞いたことないですが、この歌のように風情を感じる短歌を詠んでみたいものです。



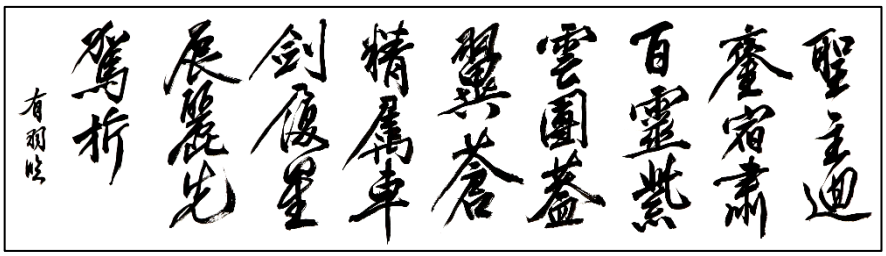
19

木下有羽　四回生

臨書　行書　文徴明『自書七言律詩』　半切横

「聖主廻鑾宿粛百霊紫雲団蓋翼青精属車剣履星辰麗先駕旅」

大阪市美術館の特別展「王羲之から空海へ」において最も惹かれた作品の一つを臨書しました。この作品から感じられる文徴明らしいシャープな線質と左右に伸びる長短入り交じった点画、そして自由な書きぶりが表現できていればと思います。



20

島津七明　修士一回生

臨書　隷書　作者不詳『曹全碑』　15cm×38cm

「平元年遭水災害退神之徒不寺門承望……（略）」

切りました。

NO IMAGE

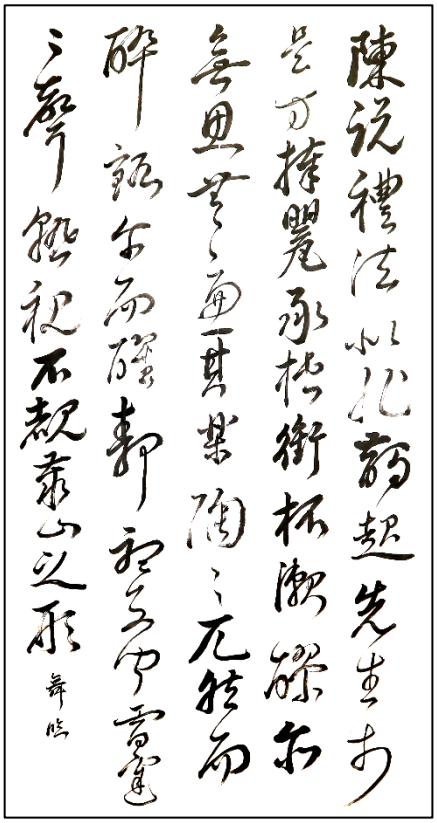
21

杉本舞　三回生

臨書　行書　董其昌『酒徳頌巻』　全紙

「陳説禮法似非鵲起先生于是方捧甕承桶含杯漱醪亦無思……（略）」

董其昌の、力強さと連綿の美しさを兼ね備えた書が少しでも表現できていれば嬉しく思います。ご批評よろしくお願いします。



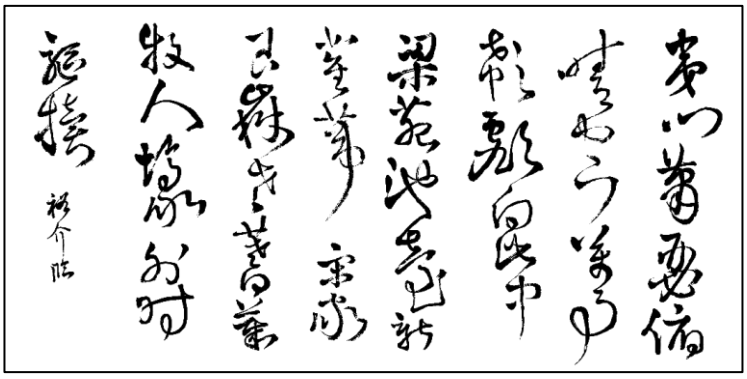
22

角裕介　三回生

臨書　草書　王鐸『草書七律五首巻』　全紙横

「夷門蕭瑟俯晴空　萬事欷歔向此中　梁苑池臺新雀羣　宋家艮嶽老蒼叢　牧人壕外時驅犢」

冬樟展に引き続き、王鐸を選びました。一見、縦横無尽に乱れているかのような形ですが、どこか均衡の取れたような感じが飽きません。ぱっと見て、王鐸だとわかるような作品を目指したく思います。



23

宗哲仁　修士一回生

創作　行草書　『俯仰媿古今』　半切

「俯仰媿古今」

後輩は眩しく輝き、先輩の背中はますます大きく見え、隣では同輩が大きな一歩を踏み出している。愧じ入ることはしたくない、そんな思いです。

24

仲村康太郎　三回生

創作　行書　『灪』　色紙

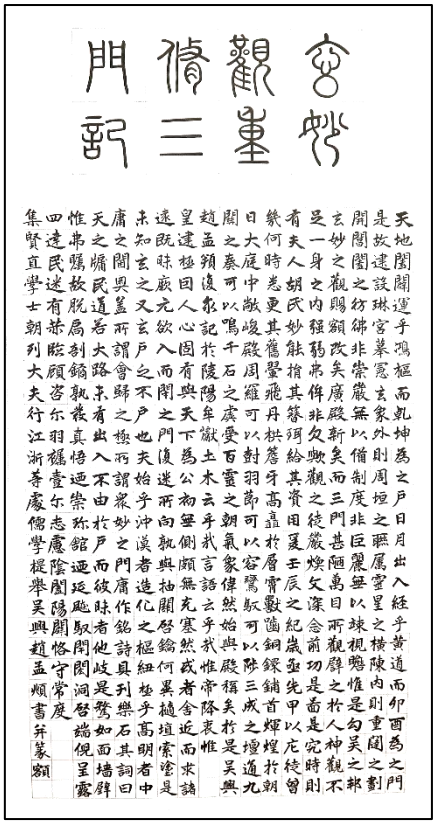
「灪」

「灪」は「法」の正字。古代、「鷹（ち）」という、罪人を見分けられる不思議な鹿がいて、その鹿が裁判を左右したという。今の時代からすれば「法」もへったくれもない話である。ところで、日本でいうところの書道は中国では「書法」。「法」は規範の意。古典によらぬ書の無法者になってはいないかと、自問の絶えない。

25

中村勇真　二回生

臨書　楷書　趙孟頫『玄妙観重修三門記』　全紙



天地闔闢運乎鴻樞而乾坤爲之戸日月出入経乎黄道而卯酉爲之門是故逮設琳宮葺憲玄象外則周垣之聯属雲星之横陳内則重閨之劃開閶闔之彷彿非崇厳無以備制度非臣屬無以竦観瞻惟是勾吴之邦亘一身之内雖勢弗侔非夕暮之徒厳煥文藻念前功是嗣是究時則有夫人胡氏妙能指其篆頌給其資用夏王辰之紀歳在先甲以庇綏留幾何時羌更其舊甍飛丹栱簷牙高啄層甍數遷銅鏁銷首煇煌於朝日大庭中敞峻殿周羅可以射羽節可以容鸞駅可以陟三成之壇通九閽之奏可以鳴千石之虡受百霊之朝氣象偉然始與殿稱矣於是吴興趙孟頫復記於陵陽牟嶽土木云乎哉言語云乎哉惟帝降衷惟皇建極回人心固有與天下爲公初無側頗無充塞然或者舎近而求諸遠既昧厥元欲入而閘之門復迷所向執與抽關啓鑰何異樞垣索塗是未知玄之又玄戸之不戸也夫始乎沖漠者造化之樞紐極乎高明者中庸之閫奥蓋所謂會歸之極所謂衆妙之門庸作銘詩具列樂石其詞曰天之媾民通若大路未有出入不由於戸而彼昧者他岐是鶩如面墻辟惟弗躡叛脱爲刻鏤執義真悟迺崇称館迺近廼取端倪呈露四達民迷有蒂眩顧容尔羽儀壹尔志慮陰閣陽開惟守常度集賢直學士朝列大夫行江浙等處儒學提挙吴興趙孟頫書并篆額

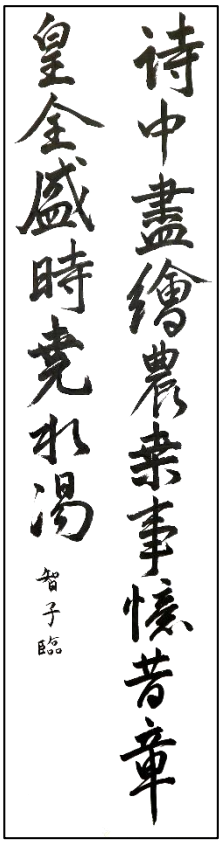
26

野田智子　二回生

臨書　行書　董其昌『頒風図詩巻』　半切

「詩中尽絵農桑事憶昔章皇全盛時堯水湯」

初めて董其昌の作品を書いてみたのですが、字のバランスをとるのが難しく苦戦しました。一行目の字をおさまるように大きさを整えるのも大変でした。また、字の太さ細さの特徴を出すように心がけました。そして、伸ばすところはなめらかな線を出すことを目標に挑戦しました。



27

挾間優美　二回生

臨書　楷書　王羲之『東方朔画賛』　半切

「若及博物触類多能合変以明讃以知来典八素九丘陰陽図緯之学百家衆流之論」

穏やかで優しそうな作品の雰囲気に惹かれて臨書しました。全体のバランスを整えること、柔らかい線を出すことに苦戦しましたが、好きなだけ時間をかけて書く楷書が好きだなぁと改めて実感した作品制作でした。

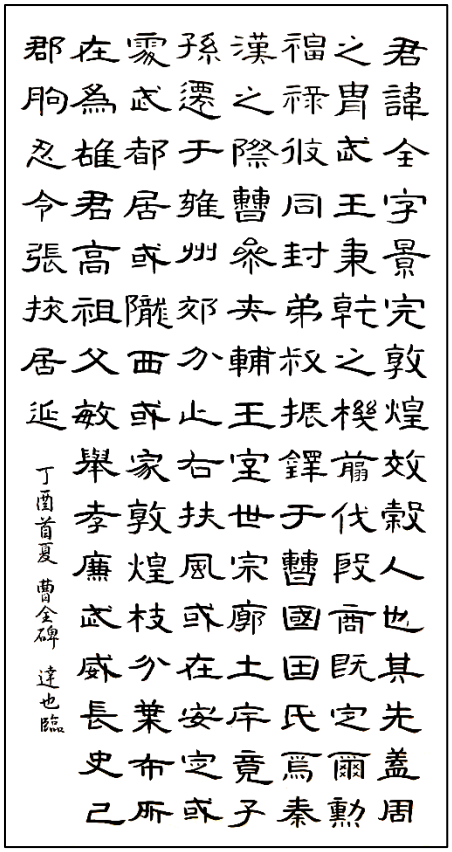
28

平井達也　二回生

臨書　隷書　作者不詳『曹全碑』　全紙

「君諱全字景完敦煌效穀人也……巴郡朐忍令張掖居延」

書道において隷書体の範を示し、後世から高い評価を受けている『曹全碑』。全体的にはしなやかで美しく女性らしい。しかし、一本一本の線は芯が通っている。私のまだ見ぬ作者は、きっと凛然たる人物であっただろうと想像しています。



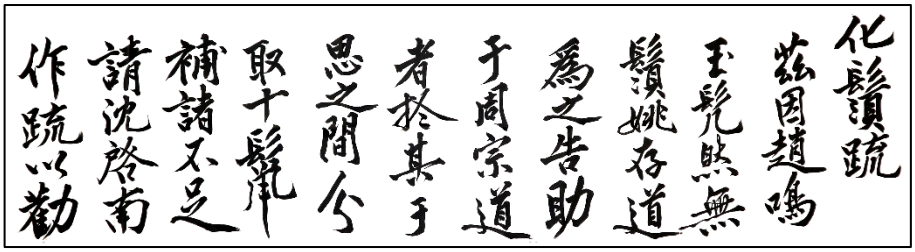
29

平野晶子　三回生

臨書　行書　沈周『化鬚疏』　巻子

「化鬚疏有序茲因趙鳴玉……（略）」

沈周が鬚にまつわる愁いを徒然なるままに綴った文章です。その繊細さと説得力を兼ね備えた線質を再現できているでしょうか。



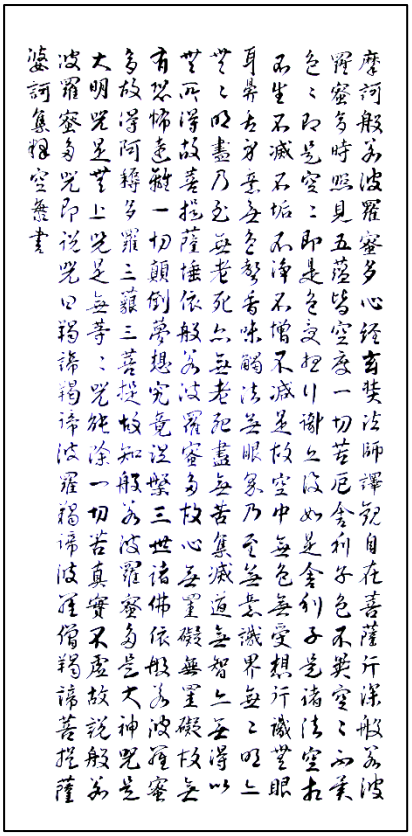
30

藤井基弘　ＯＢ

臨書　行草書　空海『集釈空海書　般若心経』　全紙

「観自在菩薩……（略）」

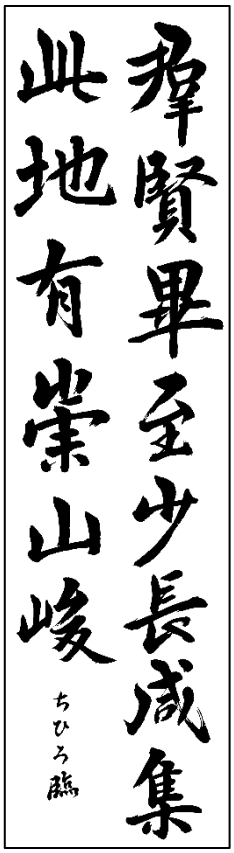
〝三筆〟に数えられる空海の書を一度臨書してみたいと思ったのだがなかなか手を出せなかったが、来年後期高齢者に属するのを機会に手元にあった『集釈空海書』を臨書してみた。一字一字臨書していると、小説で読んだ〝空海〟の情景が思い出され、畏怖の念を通り越し懐かしささえ感じた。



31

森ちひろ　二回生

臨書　行書　王羲之『蘭亭叙』　半切



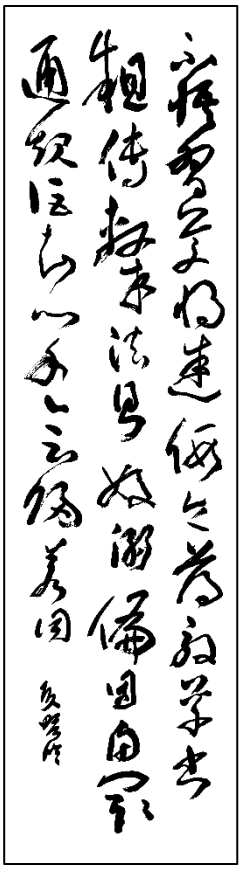
「羣賢畢至少長咸集此地有崇山峻」

今年の春に書道部に入部し、書展で出す初めての作品です。先輩方からアドバイスをいただきながら、京都の地で書道を再開できた喜びと臨書の難しさをひしひしと感じながら書きました。

32

山崎夏野　四回生

臨書　草書　孫過庭『書譜』　半切



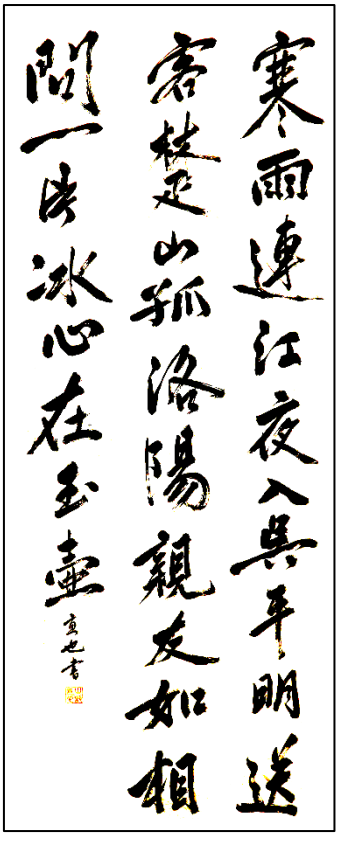
「不悟習草將迷假令薄解草書粗傳隸法則好溺偏固自閡通規詎知心手會掃若同」

書道部にいられるのもあと一年となりました。悔いのないように活動したいですね。

33

山科直也　四回生

創作　行書　『芙蓉楼送辛漸』　聯落



「寒雨連江夜入吳平明送客楚山孤洛陽親友如相問一片氷心在玉壺」

この漢詩は左遷された作者が洛陽に帰る辛漸に、洛陽に着いたら親友に玉壺の氷のような澄んだ気持ちは残っていると伝えてほしいという内容で、自分の近況と重ね、自分の書道部で培ったものや情念を込めたのでそういったものを感じてもらえると幸いである。

34

吉岡智志　二回生

臨書　行書　王羲之『集字聖教序』　半切

「是以窺天鑑地庸愚皆識其端明陰」

初の行書となりました。楷書しかやったことがなくまだまだ未熟なのでもっと頑張りたいものです。

35

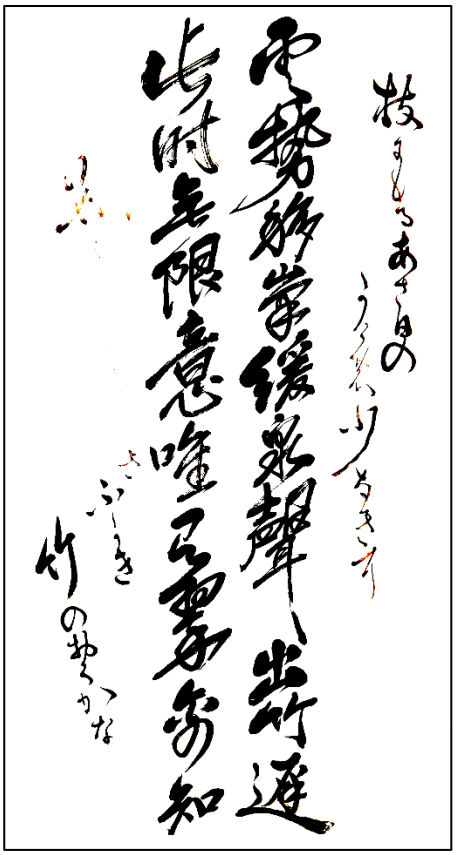
金山優作　二回生　・　佐山侑莉　二回生

創作　行書・かな　『夏の清陰』　全紙

「雲勢移峰緩泉声出竹遅此時無限意唯有翠禽知

枝にもるあさひのかげの少なきにすずしさふかき竹のおくかな」

夏らしい漢詩と和歌を行書と仮名で書きました。漢詩は邵康節の「福昌縣會雨」で、雲の流れ、竹林をもれる泉聲の情緒を詠んだ詩です。和歌は藤原為兼の作で枝が光を遮り、涼しさが感じられる竹林の奥を詠んだものです。中央に佇む力強い行書と揺れ動く葉の如き仮名の調和がとれているでしょうか。



36

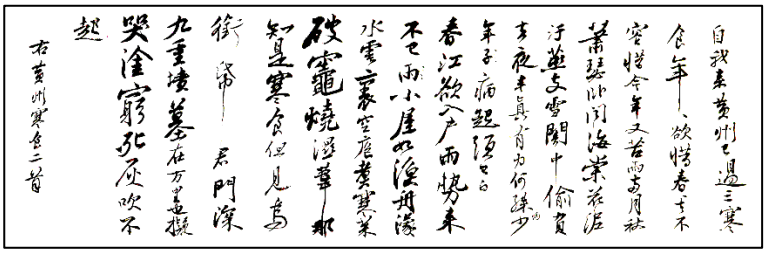
中村直樹　三回生　・　原誠人　三回生

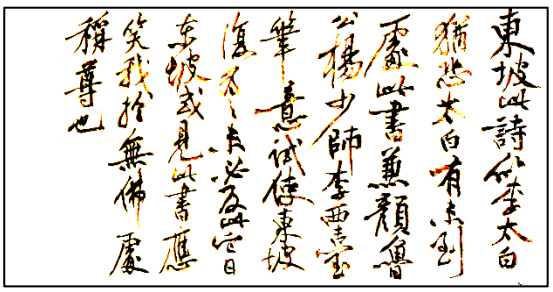
臨書　蘇軾・黄庭堅『黄州寒食詩巻／黄州寒食詩巻跋』　巻子

「自我来黄州已過三寒食年々欲春惜……（略）

東坡此詩似李太白猶恐太白有未處……（略）」

書道史における大家蘇軾が黄州流罪中に詠んだ詩二篇を書いた『黄州寒食詩巻』。それに親友黄庭堅が卓越した跋を加えている。宋代屈指の書家であり、かつ親交の深い二人の作品は、各々の代表作の一つとなっている。親友との合作が代表作とされているなんて、二人も草葉の陰から喜んでいることでしょう。





37 全体合作

創作 『心理テスト』

百四十四字の漢字の中から最初に見つけた三つの熟語が、あなたの人生にとって重要なものです。少し前に流行った心理テストの京大書道部版を部員全体で合作してみました。是非お気軽にお楽しみください。

38 三回生合作

創作 『思い出のあの書を再び』

早いもので幹部回生としての一年がこの書展を最後に終わろうとしています。その節目として、今回の三回生合作では、書道部入部以降書いてきた過去の作品を一人一人が振り返り、特に思い入れのある作品を再現してみました。以前書いた時よりも少しでも上達していればよいなぁと思うばかりです。

39 二回生合作

創作 『他己紹介』

個性豊かな二回生。お互いが、それぞれの印象を漢字一文字や短文で表現してみました。一人一人のキャラクターをなんとなくでも感じていただけたら嬉しいです！

40 新入生合作

創作 『難読漢字しりとり』

書道部に入って初めての書展作品です。新入生皆で知恵を出し合って難読漢字を書きました。実は読みがしりとりになっています。皆さんは読めるでしょうか。是非、挑戦してみて下さい。